

## 津守真先生とはるにれの会

友定啓子 (元大学教授)

入江礼子 (元大学教授\*)

この報告は今号特集に掲載の「津守真先生を追悼し語らう会」で行われた講演を基にしている。「はるにれの会」は、本誌に1985〜93年にかけて「若いお母さんたちへ」という記事を投稿し続けたユニークな保育研究会であり、記録的意義があると考え、別稿として掲載する。

◇ ◇ ◇

皆さまこんにちは、友定啓子です。

今日のこのお話は、入江礼子さんと私が二人で行う予定でした。しかし先日、入江さんが体調を崩されて、今日この会場に来ることができません。3月の初めから二人で相談し資料を集めたりして準備を進めてきましたが、

今日は私がひとりでがんばります。

「はるにれの会」というのは、大学を卒業後も津守先生とつながりながら、子どもについて学ぼうとしたゆるやかな集まりのことです。1980年から2013年まで、33年間にわたって活動続けました。この間、津守真先生と房江先生のお二人に支えられながら活動をしてきましたので、そのことを紹介しながら、津守先生をしのびたいと思います。

## 「遊びをみつめる会」

はるにれの会の前身にあたる「遊びをみつめる会」は、入江礼子によって始められまし

友定啓子 (ともさだ けいこ)  
元 山口大学教育学部教授・同附属幼稚園園長。

入江礼子 (いひえ れいこ)  
元 共立女子大学家政学部児童学科教授。

た。その経緯を、入江は次のように書いています。

この会は、1980年に、津守研究室の卒業生数名が中心となって始めました。全国に散った友はそれぞれに子育ての時期に突入していました。そのような状況の中、子育ての日々で考えたこと、感じたことを文章に残して読みあおうということを計画したのです。現在のようにパソコンも携帯もまだなかった時代、それぞれが書いたものを集約し、当時の最新鋭機器であったゼロックスでコピーして郵送し、読みあうというものでした。なにしろ「記録の津守研」を自負していた私たちでもありました。記録を書き、読んでもらいたかったのです。この計画を先生にお話すると、先生も喜んで協力してくださいることになりました。「遊びをみつめる」ことは、大学時代に私たちがなによりも大切にしていたことでした。

これが、第1号のレポート集です。こちらが本文で、家庭での子どもの記録です(図1)。右

は第2号の目次です。第1号の記録に関して、

房江先生がコメントを寄せ、眞先生は感想を寄せてくださいま

した。毎号10人くらいの投稿があり、50ページから100ページになりました。これをコピー製本して仲間に送ったわけです。

こちらは第1号に寄せてくださった、津守先生からの記録法に関するアドバイスです(図2)。特に最後の「数週間 数ヶ月間 記録できないときがあっても、もうだめだと思っ

て断念しないこと。長い期間に、半年くらい記録が欠けても、何でもない」というくだりに、大いに励まされた私たちです。



▲図1 「遊びをみつめる」レポート集から  
(左：第1号の本文、右：第2号の目次)



読書会・勉強会・オープン事務局など、今思えばたいへん精力的に活動をしていました。

### 「保育研究グループ『はるにれ』」

そのうちに、この会の仲間が学会に研究発表することや保育雑誌に投稿することなども次第が増えていきました。しかし、仲間の多くは専業主婦をしていたこともあって、いわゆる公的な意味での「所属」をもっていませんでした。そこで、それならば自分たちでつくってしまおうと、会の名称を「保育研究グループ『はるにれ』」に変更し、研究的な性格を表に出しました。これには房江先生の後押しもありました。入江は、房江先生の存在はとも大きく、自分たちのひとつのロールモデルだったと言っています。どこにも所属せず、家庭に身を置きながら、研究者として自立している姿が、仲間の支えになっていたのです。このように、30年間で変動はありましたが、先生の講演会だけは変わらず続けていきました

た。それは次第に「保育研究セミナー」という形に進化していきました。1日または2日をかけての、講演2本とフリートークの構成になりました。これは先生からの、もう一人、演者を立ててほしいという注文から始まりました。それに応答して、会のメンバーや、その時々にお話を伺いたいと思う方を演者に立てることを続けました。先生はそこにも参加してくださり、フリートークにも加わってくださいました。毎回の参加は30名から50名程度でした。この間に、会の運営も若い世代に受け継がれていきました。

これは、先生がお話しくださった講演の全タイトルです(図3)。テーマを見ると、保育現場でそ

84	理解するということ	95	OMEF世界大会前夜
85	精神科学としての教育学	96	障害者福祉の歴史・自分史
86	この3年	97	保育の方法論について
87	保育的思考について	99	生命性と知性
89	自我の発達	00	現代人のライフプラン
91	8年たって現場で何を学んだか	01	花と子どもと小鳥 —大人の世界に与えられた恵み
92	10年たって考えること	02	保育の知
93	平和教育について	03	子どもの中のストーリー
94	無題	05	発達診断再考

▲図3 津守先生の語られたこと

の時々と考えたことのほかに、学問的テーマも多く語ってくださいました。先生が常に子どものそばに身を置きながら、同時に「学者」であったことを実感させられます。

### 津守眞講演集

### 『保育の現在―学びの友と語る―』

こちらは、

2013年にはるにれ最後  
の活動として  
取り組んだ、  
津守先生の講  
演集、『保育



▲図4 『保育の現在』表紙

の現在―学びの友と語る―』です(図4)。お茶大での最終講義とはるにれの会での講演7本が収録されています。実は、前に一度、これを出版したいとご相談したことがありました。しかし、先生に「そんな私の話したことをまとめる時間があつたら、あなた方は自分たち

の仕事をしつかりなさい」と言われてしまいました。それから15年後、私たちはもう一度お願いに上がりました。先生は「これはこれでいいかもしれないね。そのときのあのこと、このことが思い出されたり、自分が自分の本を作るのではない視点からみると、いろいろなことが考えられておもしろいです」とおっしゃって、房江先生と一緒にタイトルも考えてくださいました。

この講演集を作るときのエピソードを一つ紹介します。講演集の第3章には、静岡県富戸で行われた講義が収録されています。子ども連れの参加も多く、先生の講義以外は、子どもたち中心の2泊3日の日程でした。この時のテープには、せみ時雨と子どもたちの喧騒の中でも、先生がそれらのことに少しも動ぜず、講義をしてくださった様子が残っています。セミにも子どもにも負けず、ドイツ語まじりの難解な講義が延々と続きました。最後に、先生が原稿から顔を上げられて「誰

か聞いてんのかな？」とおっしゃったのです。笑うしかない私たちでした。

テープを聞きながらあらためて、先生は自身の学問的課題を究めていくことが本当に好きだったんだなと思いました。ちなみに、この時の難解な書物は、のちに、浜口順子さんによつて翻訳出版されました。また1996年に、この会のメンバー4人で、10数年前の記録を掘り起こして、『育児日記からの子ども学』という本も出版しました。津守先生の古希のささやかなプレゼントになりました。

### 今を話すんだ、今を話すんだ

最後に、先生は講演の前には、「今を話すんだ、今を話すんだ」と思いながら、毎回足を運んでいたと話しておられました。その「今」のお話の中には先生ご自身が迷われたこと、つらいこと、困ったことも含まれていました。子どもとの応答を率直に話してくださるとき、少し恥ずかしそうなそして真剣な表情が、

今も目に浮かびます。そんな先生の「今」を学ばせていただいた30年間であったと思います。

津守先生、私たちにたくさんのことを残してくださつてありがとうございました。

### 参考文献

- 1 津守眞著 津守眞講演集『保育の現在―学びの友と語る―』萌文書林 2013年
- 2 友定啓子・入江礼子・橋爪千恵子・榎田二三子著『育児日記からの子ども学』勁草書房 1996年
- 3 ヘルムート・ダンナー著 浜口順子訳『教育的解釈学入門―精神科学的教育学の方法』玉川大学出版部 1988年

\*入江礼子様は2019年4月25日逝去されました(享年68歳)。心よりご冥福をお祈りいたします。(編集委員会一同)